

よい文章を書くための15カ条 (解説編)

平成15年6月7日発行「補習校だより」第8号より抜粋

なくてもよい言葉や部分(表現のダブリ・文脈から判断できること)は削る。

「なくてもよい言葉や部分」には、次の二通りがあります。

A．重複した表現(表現のダブリ)

B．なくても分かる言葉

Aを戒めるときよく用いられるのが次の例です。

「昔の武士の侍が、馬から落ちて落馬して、女の女性に助けられ……」

「そんなことしないよ」と笑っている子ども達に、「君達も『約十分ぐらい』などと言っているじゃないか」と言ってもきょとんとしていますので、「約十分」か「十分ぐらい」でよいことをいうと、初めて「そうか」という顔をします。

Bの例は、の例文中の「宿題」がそれにあたります。二度目と三度目の「宿題」は「文脈から判断できること」ですから削ります。

重箱の隅をつつくようではありますが、「なくてもよい言葉や部分」の具体的な物差しとして挙げました。こういう目で仔細に点検すると、当てはまる箇所がけっこうあるもので、修正後のすっきり感は、低学年の児童にも明らかです。

文末の文体を揃える。

「文末の文体」には、
 . デス・マス体、
 . デアル体、
 . ダ体があります。
 を敬体・丁寧体、
 を常体・普通体といいます。

次は、それらが混在している例です。

「現地校の校庭は芝生である。転んでも痛くありません。だから、保護者も安心だ。」

文末を揃えてみましょう。

デス・マス体「・・・芝生です。・・・痛くありません。・・・安心です。」

デアル体「・・・芝生である。・・・痛くない。・・・安心である。」

ダ体「・・・芝生だ。・・・痛くない。・・・安心だ。」

このような例が見られるのは、小学校高学年からです。それまでは文章語＝デス・マス体と思っているので、こういう現象は起こりません。デアル体を知り、その大人っぽい、自信ありげな調子に惹かれかれたところから生じる現象であり、その点では、子どもが成長し、文末を多彩にしていこうとすることの表れとも見られます。

ともあれ、「デアル体」と「ダ体」ならそれほど目障りりではありませんが、これらと「デス・マス体」とが意味なく混在するのは、読み手に違和感を覚えさせるという点で「達意」に反します。